エンパワメント型アートセラピーの社会的構築

ー 心理療法・芸術諸学・エンパワメント科学と社会学との対話 ー

神戸医療福祉大学　兼子　一

1.　目的

この報告の目的は、アートセラピーの新動向を解説（石原・兼子 2015）、理論化（兼子 2016，石原 2017）するにあたり、この領域に関係する諸学問との対話が調査結果の理論化にどのような影響を与えたのか検証することにある。また、学際領域において社会学が持つ理論構築の能力を再評価したい。市井の人々が行う未定義状態の新しい実践活動を概念化する上で、社会学の支援的（エンパワメント的）役割を提案したい。

2.　方法

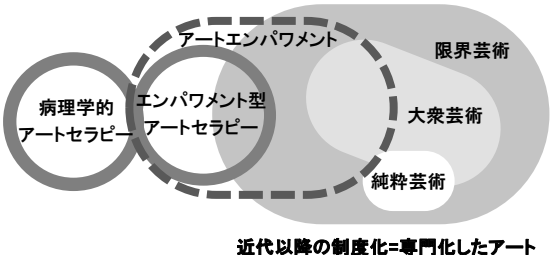
報告者は、元々、社会学理論の研究・信者による布教活動の研究とそれに伴う質的調査法を研究していた。特にエスノメソドロジーから生まれた人々によるカテゴリー化実践の研究とフーコーの権力論を基礎とした研究を重視している。また、調査方法としてはアクティヴ・インタビューを基盤としたフィールドワークを重視している。

しかし、この研究に着手するに当たり、諸学との対話の中で最初に期待されたものは、「アートセラピーの全国実態調査」という量的な実態の把握であった。心理療法家も芸術家もエンパワメントを重視する社会起業家（社会福祉の実践家）もみなさん自分が関わるミクロな場面よりも、社会のどんな場所に位置づけられるのか、マクロな視点をとても気にしていた。そのため、量的調査（アンケート調査）と質的調査（インタビュー・参与観察）の両面作戦をとること（石原・兼子　前掲書）になった。

3.　結果・結論

現代のアートセラピー、特に市井で拡大しているものは、精神医学で用いられてきたアプローチとは大きく異なるものだった。そして、市井のアートセラピストたちは、既存の精神病理学に馴染まない自分たちの実践を正当なものとして語る手段を持っていなかった。そのため、我々は「病理学的アートセラピー(PAT)」と異なるエンパワメント性に特徴を持つ新しいアートセラピーを「エンパワメント型アートセラピー(EAT)」と新たに定義した。そして、近年増加傾向にあるエンパワメントを目的としたアート活動を「アートエンパワメント(AE)」として整理した。これによって、アート活動とセラピー活動の領域が図のように整理できる。その結果、アートを用いる社会起業家は自分の立ち位置を把握し、説明責任を果たせるようになるのである。このような当事者と共にカテゴリー化実践を進めることは、「アクション・リサーチ」的あり方と言えるのかもしれない。

日本におけるアート/セラピー/エンパワメントの位置関係



［文献］

石原みどり　2017　「日常に根ざすアートとアートセラピー　ー「エンパワメント」概念によって見えてくる構図ー」『a+a　美学研』，第 10 号，大阪大学大学院文学研究科美学研究室，pp.96-109.

石原みどり・兼子一　2015　「エンパワメントとしての市井のアートセラピー活動ー全国実態調査から見えるその内発性と自律性ー」『心の危機と臨床の知』第 16 号，甲南大学人間科学研究所，pp.105-130.

＊上記文献は、http://www.konan-u.ac.jp/kihs/categories/wp-content/uploads/2015/03/kiyo16-2.pdf にて閲覧可能。

兼子一　2016　「書評：藤沢美佳著『生きづらさの自己表現　ーアートによってよみがえる「生」ー　』」『フォーラム現代社会学』第 15 号，pp.119-122.

＊本報告は，JSPS 科研費・挑戦的萌芽研究 24653153「アートセラピーの全国実態調査」(2012-14 年度，研究代表者：兼子一)および同研究 15K13105「エンパワメント型アートセラピーの構成要件の解明と評価基準の開発」(2015-17 年度，研究代表者：兼子一)の研究成果の一部である。